

#### 4 観光（観光資源）

七尾市は、七尾港を海の玄関口とし、古くから能登地域の政治、経済、文化の中心地として栄え、歴史的価値の高い能登国分寺跡や七尾城跡などの史跡、青柏祭の曳山行事や熊甲二十日祭の杵旗行事などの貴重な有形・無形の文化財が数多く存在している。

また、能登島とそれを取り囲む七尾湾やその沿岸部などが能登半島国立公園に指定されており、豊かな自然も残っている。その自然を背景とした「能登野菜」、「いきいき七尾魚」などの新鮮な食材や開湯1200年の歴史を持つ「和倉温泉」などの恵まれた地域資源を活かした観光が本市の大きな産業となっている。

七尾市の主要な観光施設を訪れた観光客数は、平成19年度から平成27年度にかけて、約350万人から約380万人で推移している。

平成19年度には能登半島地震の影響、平成21年度にはリーマンショックや新型インフルエンザの影響等で約360万人にとどまった。さらに、平成24年度は東京スカイツリーの開業等の影響で約350万人と、この期間においては最少となった。

平成27年度には、平成27年2月の能越自動車道七尾氷見道路の全線開通や、同年3月の北陸新幹線金沢開業により七尾への交通アクセスが強化されたことにより、本市を訪れた観光客は約380万人となった。

なお、七尾城跡についても近年の城ブームも重なって訪問者数が増加傾向となっている。七尾市及び主な観光地の来訪者数を以下に示す（資料：七尾市観光交流課）。

（単位：千人）

年度	H19	H20	H21	H22	H23	H24	H25	H 26	H 27	H 28
七尾市全体	3,607	3,815	3,684	3,733	3,681	3,513	3,704	3,634	3,833	3,929

主な観光地	H19	H20	H21	H22	H23	H24	H25	H 26	H 27	H 28
和倉温泉	832	906	810	874	852	789	852	814	941	958
石川県七尾美術館	23	36	41	30	26	29	31	27	65	35
石川県能登島ガラス美術館	43	51	48	51	49	42	41	39	40	40
能登食祭市場	767	803	764	804	741	713	775	805	865	824
ひよっこり温泉島の湯	148	142	140	140	128	116	119	116	124	120
のとじま臨海公園水族館	396	408	400	448	473	417	443	411	414	427
七尾城史資料館	2	3	4	3	3	3	3	4	5	6
七尾城跡（本丸）	10	14	18	14	16	14	14	18	22	23

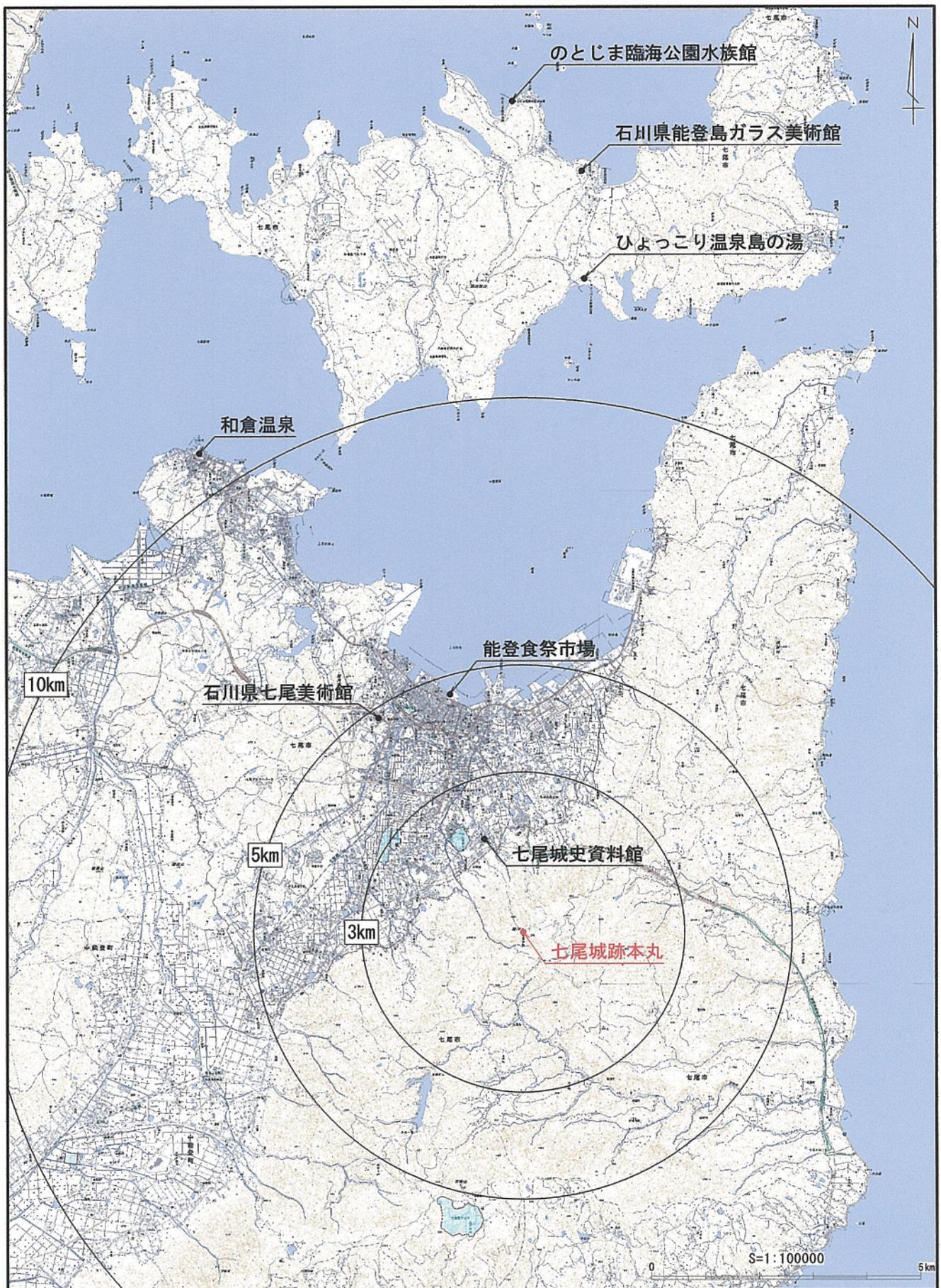


図 29 七尾城跡周辺の主な文化観光施設



和倉温泉



石川県七尾美術館



石川県能登島ガラス美術館



のとしま臨海公園水族館



能登食祭市場

## 第4項 周辺の文化財

史跡七尾城跡をはじめ本市には277件の指定文化財（国13件、県26件、市238件）及び14件の国登録文化財、1件の重要美術品が所在している。

### 【国指定文化財】

No.	種 別	名 称 及 び 員 数	管理者 または 保存団体等
1	建 造 物	藤津比古神社本殿 附棟札 一棟・二枚	藤津比古神社
2	建 造 物	座主家住宅 一棟	座主 珠恵
3	絵 画	絹本著色 前田利春画像 一幅	石川県七尾美術館
4	彫 刻	木造 千手観音坐像 一軀	大龍山 海門寺
5	彫 刻	木造 久麻加夫都阿良加志比古神坐像 一軀	久麻加夫都阿良加志比古神社
6	工 芸 品	刺繍 阿弥陀三尊像 一幅	石川県七尾美術館
7	重要無形民俗文化財（風俗習慣）	青柏祭の曳山行事	青柏祭でか山保存会
8	重要無形民俗文化財（風俗習慣）	気多の鶴祭の習俗	鶴浦町会（鶴捕部）、気多神社
9	重要無形民俗文化財（風俗習慣）	熊甲二十日祭の杵旗行事	お熊甲祭奉賛会
10	史 跡	七尾城跡	七尾市
11	史 跡	能登国分寺跡 附建物群跡	
12	史 跡	万行遺跡	
13	史 跡	須曾蝦夷穴古墳	



No.3 前田利春画像



No.7 青柏祭の曳山行事



No.11 能登国分寺跡附建物群跡

【県指定文化財】

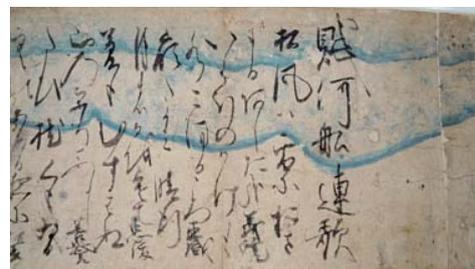
No.	種 別	名 称 及 び 員 数
1	絵 画	絹本著色 長齡夫人画像 一幅
2	絵 画	絹本著色 三尊来迎図 一幅
3	絵 画	紙本墨画 達磨図 長谷川信春（等伯）筆 一幅
4	絵 画	紙本淡彩 十六羅漢図 八幅
5	絵 画	絹本著色 印鑰明神垂迹図 一幅
6	絵 画	絹本著色 愛宕権現図 長谷川信春（等伯）筆 一幅
7	絵 画	紙本墨画 陳希夷睡図 長谷川信春（等伯）筆 一幅
8	絵 画	絹本著色 善女龍王図 長谷川信春（等伯）筆 一幅
9	絵 画	紙本墨画 猿猴図屏風 長谷川等伯筆 二曲一隻
10	絵 画	紙本墨画 松竹図屏風 長谷川等伯筆 二曲一隻
11	絵 画	絹本著色 涅槃図 一幅
12	彫 刻	木造 阿弥陀如来坐像 一軀
13	彫 刻	木造 薬師如来坐像 一軀
14	典 籍	紙本墨書 正法眼蔵・伝光録・正法眼蔵 仏祖悟則 附 納入箱 八十二冊・一合
15	典 籍	賦何船連歌 一卷
16	歴 史 資 料	伊夜比咩神社棟札 三十二枚
17	無形民俗文化財 (風俗習慣)	日室の鎌祭り（「能登の諏訪祭りの鎌打ち神事」のうち）
18	無形民俗文化財 (風俗習慣)	能登島向田の火祭
19	無形民俗文化財 (民俗芸能)	七尾まだら（「能登のまだら」のうち）
20	史 跡	院内勅使塚古墳 一基
21	史 跡	赤蔵山
22	史 跡	上町マンガラ古墳群 二基
23	天 然 記 念 物	飯川のヒヨドリザクラ
24	天 然 記 念 物	伊影山神社のイチョウ
25	天 然 記 念 物	岩屋化石層
26	天 然 記 念 物	唐島神社社叢タブ林



No. 3 達磨図（長谷川信春（等伯）筆）



No. 12 木造 阿弥陀如来坐像



No. 15 賦何船連歌

【市指定文化財】

No.	種別	名称及び員数	No.	種別	名称及び員数
1	建造物	総社本殿 一棟	31	彫刻	木造 聖観音立像 一躯
2	建造物	熊野神社本殿 一棟	32	彫刻	木造 長景連像 一躯
3	建造物	日吉神社本殿 一棟	33	彫刻	木製 鬼瓦 一基
4	建造物	妙剣白石神社本殿 一棟	34	彫刻	木造 獅子頭 一頭
5	建造物	東嶺寺本堂 一棟	35	彫刻	爺婆面 二面
6	建造物	東嶺寺山門 一棟	36	彫刻	木造 阿弥陀如来坐像 一躯
7	建造物	赤倉神社拝殿 一棟	37	彫刻	木造 観音立像 一躯
8	建造物	赤倉神社本殿 一棟	38	彫刻	牛ヶ鼻観音（木造 十一面観音立像）一躯
9	建造物	赤倉神社仁王門 一棟	39	彫刻	木造 随神像 一对
10	建造物	室木邸主屋一棟・納屋二棟・米倉一棟・土蔵二棟	40	彫刻	木造 狛犬 一对
11	建造物	宝蔵 一棟	41	彫刻	木造 随神像 一对
12	絵画	釈迦涅槃図 一幅	42	彫刻	木造 狛犬 一对
13	絵画	三千仏画像 一幅	43	彫刻	木造 釈迦三尊像 一躯
14	絵画	絹本著色 十三仏画像 一幅	44	彫刻	木造 聖観世音菩薩立像 一躯
15	絵画	絹本著色 日蓮画像 一幅	45	彫刻	木造 狛犬 一对
16	絵画	絹本著色 前田安勝画像 一幅	46	彫刻	木造 漆塗獅子頭 一頭
17	絵画	絹本著色 前田利政画像 一幅	47	彫刻	猿田彦面 一面
18	絵画	紙本著色 涅槃図 一幅	48	彫刻	翁面 一面
19	絵画	紙本白描淡彩 涅槃図模本 一幅	49	彫刻	媼面 一面
20	絵画	熊木左近将監公肖像 一幅	50	彫刻	木造 獅子頭 一頭
21	絵画	螢山紹瑾禪師自賛画像 一幅	51	彫刻	木造 随神像 二躯
22	絵画	絹本著色 涅槃図 一幅	52	彫刻	木造 釈迦如来坐像 一躯
23	絵画	紙本淡彩 十六羅漢図 二幅	53	彫刻	木造 文殊菩薩坐像 一躯
24	絵画	絹本著色 長好連像 一幅	54	彫刻	木造 普賢菩薩坐像 一躯
25	絵画	紙本墨画 淡彩山水図	55	彫刻	木造 月浦宗暹坐像 一躯
26	絵画	紙本著色 涅槃図	56	彫刻	木造 男神坐像 四躯
27	彫刻	木造 聖観音立像 一躯	57	彫刻	木造 男神女神坐像 十四躯
28	彫刻	木造 二天立像 二躯	58	彫刻	木造 女神坐像 一躯
29	彫刻	木造 地藏菩薩立像 一躯	59	彫刻	木造 薬師如来立像 一躯
30	彫刻	木造 日蓮坐像 一躯	60	彫刻	木造 随神像 二躯

No.	種別	名称及び員数	No.	種別	名称及び員数
61	彫刻	木造 男神女神坐像 十軀	91	工芸品	銅造 菅忍比咩神社額 一面
62	彫刻	木造 毘沙門天立像 一軀	92	工芸品	銅造 大日如来懸仏 一面
63	彫刻	木造 菩薩形立像 三軀	93	工芸品	木造 蔵王権現懸仏 一面
64	彫刻	木造 三神像 六軀	94	古文書	青木家文書 一括
65	彫刻	木造 聖観音座像 一軀	95	古文書	池岡家文書 一括
66	工芸品	木製螺鈿蒔絵鞍 一脊	96	古文書	府中町文書 一括
67	工芸品	山王二十一社神楽鈴	97	古文書	高橋家文書 一括
68	工芸品	西光寺梵鐘 一口	98	古文書	櫻井家文書 一括
69	工芸品	長壽寺梵鐘 一口	99	古文書	国分町有文書 一括
70	工芸品	海門寺梵鐘 一口	100	古文書	熊淵町有文書 一括
71	工芸品	法螺貝 二個	101	古文書	小島町有文書 一括
72	工芸品	擬宝珠 二個	102	古文書	八幡町有文書 一括
73	工芸品	瓶子 二個	103	古文書	龍門寺文書 八通
74	工芸品	梵鐘 一口	104	古文書	笠師村御印 一枚
75	工芸品	欄間 一面	105	古文書	塩津村御印 一枚
76	工芸品	本堂扉 四枚一式	106	古文書	奥吉田村御印 一枚
77	工芸品	高卓 一脚	107	古文書	河崎村御印 一枚
78	工芸品	香炉 一口	108	古文書	豊田村御印 一枚
79	工芸品	花瓶 二基一對	109	古文書	豊田町村御印 一枚
80	工芸品	銭九曜文鏡 一面	110	古文書	小牧村御印 一枚
81	工芸品	梵鐘 一口	111	古文書	河内村御印 一枚
82	工芸品	梵鐘 一口	112	古文書	鳥越村御印 一枚
83	工芸品	社号扁額 一面	113	古文書	外原村御印 一枚
84	工芸品	東嶺神儀 一基	114	古文書	土川村御印 一枚
85	工芸品	鉦鼓 一口	115	古文書	横田村御印 一枚
86	工芸品	蒔絵鞍 一脊	116	古文書	北免田村御印 一枚
87	工芸品	的場孫三寄進七条袈裟 一領	117	古文書	上町村御印 一枚
88	工芸品	徳照寺喚鐘 一口	118	古文書	境塚議定書 一枚
89	工芸品	久麻加夫都阿良加志比古神社 湯立釜 一口	119	古文書	海塚議定書 三枚
90	工芸品	小牧白山社 湯立釜 一口	120	古文書	人質詰申日記 一枚

No.	種別	名称及び員数	No.	種別	名称及び員数
121	古文書	悪作につき減租免状 一枚	151	歴史資料	総社三十六歌仙額 三十六面
122	古文書	利家朱印状 一枚	152	歴史資料	総社三番叟図額 二面
123	古文書	熊木村与一家扶持宛行状安堵状 十枚	153	歴史資料	扁額 四面
124	古文書	末世目覚草 一冊	154	歴史資料	藤原四手緒天保絵馬額 一面
125	古文書	野崎区有文書 一括	155	歴史資料	龍門寺袈裟・法衣袋等 四点
126	古文書	半浦区有文書 一括	156	歴史資料	国下曆応大日板碑 一基
127	古文書	無関区有文書 一括	157	歴史資料	八幡弥陀三尊板碑 一基
128	古文書	鰻目漁業会文書 一括	158	歴史資料	鹿渡島観音額 一面
129	古文書	伊夜比咩神社文書 一括	159	歴史資料	志摩則正「開方盤」一面と和算資料七点
130	古文書	長崎区有文書 一括	160	歴史資料	新保町の石龕と宝篋印塔 一基
131	古文書	南区有文書 一括	161	歴史資料	長福寺歴史資料 十三点
132	古文書	中谷内家文書 一括	162	歴史資料	千野弥陀板碑 一基
133	古文書	木下家文書 一括	163	歴史資料	前田利家・利長石廟 一基
134	古文書	畠山義総書状 二通	164	歴史資料	赤蔵山祭事現状絵図額 一枚
135	考古資料	赤浦遺跡出土貝殻土器 一口	165	歴史資料	絵馬額 一面
136	考古資料	能登国分寺跡出土方形三尊埴仏 三片	166	歴史資料	長氏の臣郷侍邸宅配置図 一枚
137	考古資料	古代石器 二百五十点	167	歴史資料	キリシタン灯籠竿石 一基
138	考古資料	縄文土器片 二十二点	168	歴史資料	絵馬繫馬図 二面
139	考古資料	弥生土器片 十五点	169	歴史資料	弘安六年神殿棟札 一枚
140	考古資料	須恵器片 十八点	170	歴史資料	正和三年熊野権現建立棟札 一枚
141	考古資料	石斧 八点	171	歴史資料	宝篋印塔 一基
142	考古資料	凹石 二点	172	歴史資料	阿弥陀三尊板碑 一基
143	考古資料	たたき石 一点	173	歴史資料	地藏板碑 一基
144	考古資料	金環 五点	174	歴史資料	道標 一基
145	考古資料	鉄鍬ほか 八点	175	歴史資料	名号板碑 一基
146	考古資料	刀剣 四口	176	歴史資料	絵馬 一面
147	考古資料	山岸ハリ塚古墳出土遺物 三十六点	177	歴史資料	算額 一面
148	考古資料	大念寺屋敷出土遺物 一括	178	歴史資料	榭 一個
149	歴史資料	文明十一年名号板碑 一基	179	歴史資料	小牧村絵図 一枚
150	歴史資料	天満天神宮三十六歌仙額 三十六面	180	歴史資料	五傍の掲示 三面

No.	種別	名称及び員数	No.	種別	名称及び員数
181	歴史資料	能登国海辺筋村建等分間絵図	211	無形民俗文化財	丸木舟製作技術
182	歴史資料	深浦五傍の掲示 四面	212	無形民俗文化財	山崎のぼんぼらがい
183	歴史資料	谷内村境塚絵図 一枚	213	史跡	高木森古墳 一基
184	歴史資料	深浦村境塚絵図 一枚	214	史跡	三室古墳群
185	歴史資料	小牧村境塚・海塚絵図 一枚	215	史跡	千野廃寺跡
186	歴史資料	谷内観音堂安置仏像群 六軀	216	史跡	東嶺寺内長家墓所
187	歴史資料	曲大宮神社棟札 九枚	217	史跡	小牧白山社中世墓群
188	歴史資料	閨観音堂造立棟札 二枚	218	史跡	殿様道
189	歴史資料	嶋之如法経供養札 一枚	219	史跡	中島水道跡
190	歴史資料	別所神社棟札 五枚	220	史跡	佐波縄文遺跡
191	歴史資料	柴山神社棟札 三枚	221	史跡	祖母ヶ浦石塚遺跡
192	歴史資料	山王神社棟札 四枚	222	史跡	閨観音堂石塔群
193	歴史資料	山王神社絵馬 一幅	223	史跡	閨行者端五輪塔群
194	歴史資料	<b>東岳受旭無縫塔 一基</b>	224	史跡	向田信光寺石塔群
195	歴史資料	熊野神社寛文四年奉納絵馬 二七面	225	史跡	小浦左幸屋敷跡
196	歴史資料	天文十七年銘石塔 一基	226	名勝	机島
197	歴史資料	橋本家文書歴史資料 760点	227	名勝	北国八十八ヶ所霊場
198	有形民俗文化財	大旗 一旒	228	天然記念物	ケヤキ 一本
199	有形民俗文化財	豊田孫三家大旗 一旒	229	天然記念物	ラカンマキ 一本
200	無形民俗文化財	大田町の左義長	230	天然記念物	タブノキ 一本
201	無形民俗文化財	田鶴浜の左義長	231	天然記念物	スギ 一本
202	無形民俗文化財	鉦打のおすずみ祭り	232	天然記念物	小丸山公園常緑広葉樹林
203	無形民俗文化財	新宮祭の杵旗行事	233	天然記念物	椿林寺常緑広葉樹林
204	無形民俗文化財	六保のおすずみ祭り	234	天然記念物	観音島海浜植物群落
205	無形民俗文化財	六保祭の杵旗行事	235	天然記念物	雌島・雄島の植物群
206	無形民俗文化財	塩津のおすずみ祭り	236	天然記念物	大杉 一本
207	無形民俗文化財	笠師祭の杵旗行事	237	天然記念物	小牧のスダジイ 一本
208	無形民俗文化財	七尾豊年太鼓	238	天然記念物	出村家のタブノキ 一本
209	無形民俗文化財	正調 能登舟こぎ唄			
210	無形民俗文化財	獅子舞			



No.6 東嶺寺山門



No.30 木造 日蓮坐像

【登録有形文化財】

No.	種 別	名 称 及 び 員 数
1	登録有形文化財 (建造物)	北島屋茶店主屋
2	登録有形文化財 (建造物)	茅田家住宅（旧上野啓文堂）主屋
3	登録有形文化財 (建造物)	鳥居醤油店主屋
4	登録有形文化財 (建造物)	高澤ろうそく店主屋
5	登録有形文化財 (建造物)	神野家住宅主屋
6	登録有形文化財 (建造物)	勝本家住宅主屋
7	登録有形文化財 (建造物)	春成酒造店主屋
8	登録有形文化財 (建造物)	懐古館（旧飯田家住宅）主屋
9	登録有形文化財 (建造物)	赤倉家住宅主屋
10	登録有形文化財 (建造物)	室木家住宅主屋
11	登録有形文化財 (建造物)	室木家住宅 門及び塀
12	登録有形文化財 (建造物)	春木屋洋品店（旧春木屋商店洋服部）
13	登録有形文化財 (建造物)	青林寺客殿（和倉御便殿本殿）
14	登録有形文化財 (建造物)	信行寺書院（和倉御便殿供奉殿）
15	登録有形文化財 (建造物)	小山屋醤油店 店舗兼主屋
16	登録有形文化財 (建造物)	小山屋醤油店 ムロ
17	登録有形文化財 (建造物)	小山屋醤油店 醤油蔵
18	登録有形文化財 (建造物)	小山屋醤油店 土蔵



No.8 懐古館



No.13 青林寺客殿  
(和倉御便殿本殿)

【その他】

重要美術品	紙本著色 前田利家画像 一幅
-------	----------------

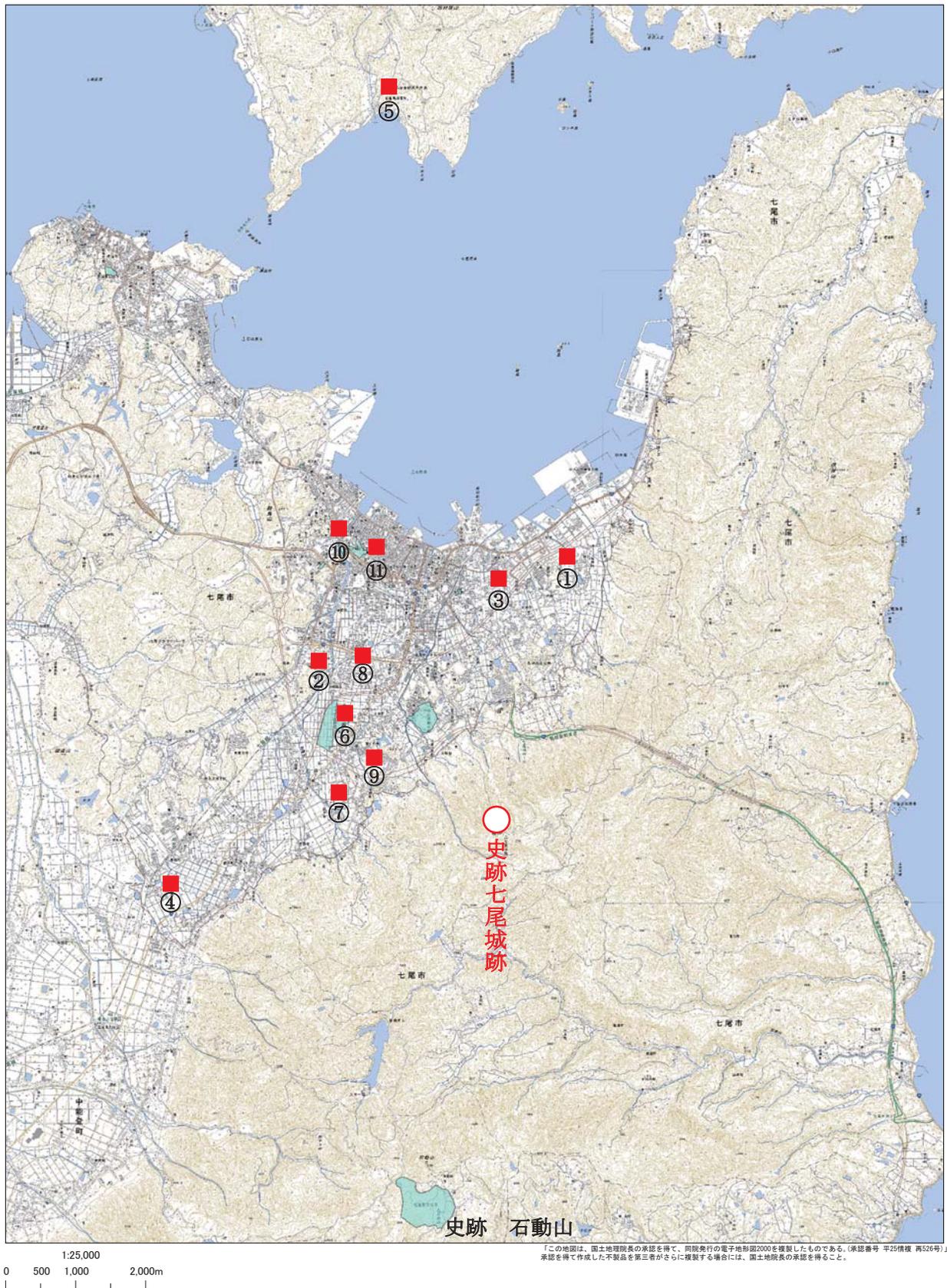
## 第5項 歴史的環境

### 1 周辺の遺跡

七尾城跡周辺には、先人の営みを知る歴代の多くの遺跡が所在しているが、ここでは古墳時代以降の主な遺跡の概要を記述する。

表 12 主な遺跡一覧

時代	No.	遺跡名	指定	住所	概要
古墳時代	①	万行遺跡	国(平成15年8月27日指定、同16年2月27日追加指定)	七尾市万行町	前期初頭に七尾港東方の万行町の海岸段丘上に形成された日本最大の倉庫群とみられる。方位に柱筋を揃えた大型掘立柱建物3棟が塀で囲まれたもので、日本海交易を背景として、地域連合体などの有力勢力が造営した可能性などが指摘されている。
	②	国分尼塚古墳群	未	七尾市国分町	七尾港南西方の国分町の丘陵に築かれた前期古墳群である。1号墳は全長約53mを測る県内有数前方後方墳で、後方部の長大な割竹形木棺からは中国製青銅鏡や銅鏃(57本)などが出土している。古墳時代前期における地域勢力と大和政権の関係を示すものである。
	③	高木森古墳	市(昭和34年11月3日)	七尾市矢田町	七尾港東方の矢田町の微高地に築かれた全長約58mを測る能登を代表する中期の前方後円墳である。後方部には竪穴式石室が想定されているが、詳細は不明である。
	④	院内勅使塚古墳	県(昭和47年3月21日)	七尾市下町	七尾港南西方の内陸部の徳田町に所在する後期古墳である。一辺約22mを測る二段築成の方墳で、北陸最大の横穴式石室を具えている。
	⑤	須曾蝦夷穴古墳	国(昭和56年1月27日)	七尾市能登島須曾町	七尾港の北対岸となる能登島須曾町に所在する終末期古墳である。一辺18.7m×17.1mの方墳で、小口積み横穴式石室を2室(一対)具える。ドーム型の持ち送り天井の石室は、朝鮮半島の墳墓に見られる特徴である。
古代	⑥	能登国分寺跡附建物群跡	国(昭和49年12月23日)	七尾市国分町、古府町	七尾港南方の国分町一帯の沖積地に所在する奈良平安時代の寺院と役所施設である。一帯は、古代能登国の中枢と見られているが、解明されるまでの成果は得られていない。平成4年度には、南門が実物大復元されるなどの史跡整備が行われ、公開活用されている。
	⑦	千野廃寺跡	市(昭和34年11月3日)	七尾市千野町	能登国分寺跡附建物群跡南方の千野町の台地に所在する。国分寺に比定されているが、役所施設とする見方もある。
	⑧	栄町遺跡	未	七尾市栄町	能登国分寺跡附建物群跡北方に所在する板塀で囲まれた掘立柱建物群で、役所施設若しくは有力者の宅地の可能性が指摘されている。
	⑨	古府タブノキダ遺跡	未	七尾市古府町	千野廃寺跡北東に近接して所在する役所施設か邸宅とみられる大型の掘立柱建物跡が発掘されている。
中世	⑩	小島西遺跡	未	七尾市小島町	七尾港西方の小島町の旧海岸線に所在する。七尾城下町に連動する戦国期の七尾湊町とみられる整然とした町割りが発掘されている。なお、同遺跡からは、古代の木製祭祀具も多量に出土している。
近世	⑪	小丸山城下町	未	七尾市小島町ほか	七尾港南方近辺一帯に所在する。七尾城落城後の天正九年(1581)に入府した前田利家が、七尾城に代わる新たな拠点として港付近の小丸山に城を築く。その周辺部に町並を整備させた。現在の七尾市街地は、小丸山城下町が発展したものである。元和二年(1616)の一国一城令により城と武家屋敷が失われ、その後は港町として発展する。城下町の西端には真宗以外の寺院群である「山の寺」、東端には真宗寺院を中心とした「御坊町」と呼ぶ寺町が現在も所在し、城下町の面影が偲ばれる。



- ①万行遺跡 ②国分尼塚古墳群 ③高木森古墳 ④院内勅使塚古墳 ⑤須曾蝦夷穴古墳  
 ⑥能登国分寺跡附建物群跡 ⑦千野廃寺跡 ⑧栄町遺跡 ⑨古府タブノキダ遺跡 ⑩小島西遺跡  
 ⑪小丸山城下町

図 30 史跡七尾城跡周辺の主な遺跡分布図（古墳時代以降）

## 2 能登畠山氏と七尾城

### (1) 能登畠山氏の領国支配と七尾城

畠山氏は、源頼朝の従臣であった足利義兼の子義純を祖とする足利一門で、能登国を領したのは、明德2年(1391)に畠山基国が守護に補任されたのをはじめとする。基国は能登国以外に、越中国・河内国・紀伊国の守護も兼ねており、応永5年(1398)に管領職に就き、細川・斯波氏とともに三管領として地位を築いている。応永13年(1406)に基国が没すると、嫡子の満家が将軍足利義満の勘気につれてきたことから、家督は庶子の満慶が継ぐこととなる。しかし、応永15年(1408)に義満が没したことにより、満慶は越中国・河内国・紀伊国の守護職を満家に譲り、自らは能登一国の守護として能登畠山家を創設した。満慶の官途名が修理大夫であったことから、その官途名をもって「畠山匠作(修理大夫)家」と総称された(伊藤1999)。ただし、当時守護は在京することが原則であったことから、領国の実質的支配は守護代があたっていた。

能登畠山氏(守護)が下向(在国)して領国支配を行うのは、将軍足利義政の跡目争いに発した応仁文明の乱後、文明11年(1479)に下向した第三代義統からである。

義統が下向、在国したことにより、能登府中や守護所の整備が進み、領国支配の基盤が固められたとみられる。こうした状況は、文明12年(1480)から文明18年(1486)にかけて、たびたび能登を訪れた招月庵正広の歌集『松下集』から、守護館を中心に家臣館などが散在する能登府中の様子が垣間見られる。さらに、文亀3年(1503)には、第五代慶致が父義統の七回忌を能登府中の大寧禅寺で勤めていることから、能登府中には守護の菩提寺となる寺院も所在した。

明応6年(1497)には、能登府中で義統が没し、嫡子義元(第四・六代)と庶子慶致(第五代)との跡目争いにより義元が越後国に亡命したが、永正3年(1506)に蜂起した一向一揆による危機感から、双方の和睦が図られた。和睦は、義元が帰国し、第六代守護に復帰すること。一方、慶致の嫡男義総(第七代)を義元の後継となる第七代守護に定めたもので、こうした妥協策によって能登畠山氏は存亡の危機を乗り越えることが出来た。

なお、「七尾」の地名が、はじめて文献に確認されるのは、永正11年(1514)で、第六代義元が大呑北庄(現在の北大呑地区カ)の百姓らに、前年の内乱の際、七尾の守護方の許に馳せ参じたことの恩賞として、年貢の十分の一を永代免除した文書(写し)にみることが出来る。この史料にみる七尾は七

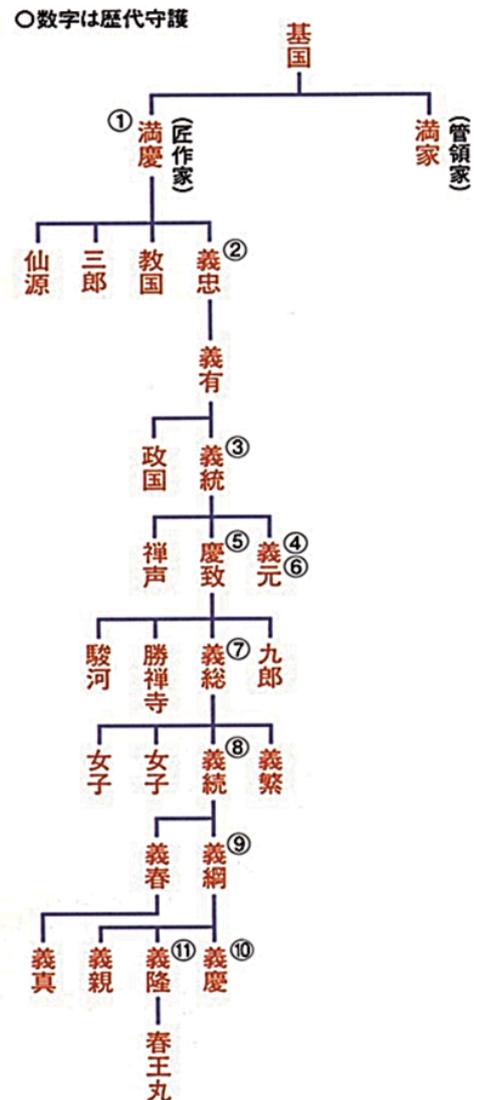


図 31 能登畠山氏略系図

尾城下（町）と考えられ、永正年間の内乱の過程で、能登府中の南東の石動山系の要害に「七尾城」を築き、その麓に城下「七尾」が形成された状況が窺われる（東四柳 1999）。

能登畠山氏の治世下で最も安定した領国経営を行なったのは、第七代義総で、後に「畠山文化」と称される文芸活動が七尾城下町で高揚した。義総自身も古典研究の第一人者で内大臣も務めた三条西実隆に師事し、七尾城内の書庫の蔵書は三万棹におよんだという。こうした義総のもとには、公家歌人の冷泉為広・為和父子、連歌師の月村斎宗碩、禅僧の彭叔守仙など、多くの文化人が京都から下向している。

大永3年（1523）には、三条西実隆が七尾に下向していた宗碩に、七夕と七尾をかけた和歌を送っており（『再昌草』所収）、京に七尾の名が知られていたことがわかる。また、大永6年（1526）に冷泉為和が詠んだ「庭ひろみ苔のみとりはかたよりてあつき日影に白きまこち」の和歌から、七尾城内の義総邸に苔庭があったことが窺われる（東四柳 1999）。

天文8年（1539）には、後に画聖と謳われる長谷川等伯が七尾で生まれ、その技量は畠山文化の影響をうけたことは想像にかたくない。さらに、天文13年（1544）に彭叔守仙が記した『独楽亭記』から、義総の政治手腕による安定した治世のもと「千門万户」と称する活況呈する城下と、「天宮」と称する大規模な城郭が連動して所在する七尾城下町の様子が窺われる。

天文14年（1545）には、義総が没したことで能登畠山氏の大名権力は弱まり、家臣団の勢力が台頭する。同20年（1551）頃には、遊佐氏や温井氏ら重臣七名からなる「畠山七人衆」に実権が握られ、重臣間での抗争が繰広げられる。

天正4年（1576）には、能登畠山氏の内部抗争に乗じた越後国上杉謙信が能登国に侵攻して、七尾城と対峙するが難攻不落の要害を誇る七尾城は容易に陥落しなかったため、謙信はいったん越後に帰国する。

翌年の天正5年（1577）に再来した謙信は、遊佐氏の内応を得たことにより七尾城を開城させ、七尾城を手中に治め、169年間続いた能登畠山氏による能登国支配も幕を閉じた。

## （2）能登畠山氏以降の能登支配と七尾城

天正5年（1577）九月、能登を領有した上杉謙信は、七尾城将に据えた家臣の鯨坂長実と畠山旧臣の遊佐続光に能登国支配を委ね、自らは越後に帰国するが、同年十月には、長実と続光が連署した分国法にあたる「十三カ条の制札」を出し、上杉氏による能登支配に向けた施策を示している。

ところが、翌年（天正6年）には謙信が急死したことにより、その跡目を争う内部抗争（「御館の乱」）が起ったことにより、能登における上杉氏の求心力が低下し、七尾城を巡る情勢が再び動く。天正7年（1579）八月頃には、畠山旧臣の温井氏・三宅氏が、上杉方から織田方に寝返り、上杉方の鯨坂長実を七尾城から追放して実権を握ったことにより、上杉氏の能登支配は2年程で幕を閉じた（瀬戸 1999）。

このことにより七尾城は、上杉氏から畠山旧臣（織田方）の拠点となるが、天正9年（1581）には、織田信長から能登一国を領有した前田利家が入城する。しかし、前田氏が天正17年（1589）年頃までに拠点を七尾湊付近の小丸山に移したことによって七尾城は廃城となる。

表 13 能登畠山氏・七尾城跡略年表

年号	(西暦)	主な出来事	領主	拠点	
延元3年	(1338)	足利尊氏が征夷大將軍となり、室町幕府が成立する。		(守護所) 府中	
明德2年	(1391)	畠山基国、河内・越中とともに、能登守護となる。	畠山基国		
応永13年	(1406)	畠山基国が没し、次男満慶が家督を継ぐ。	畠山満慶		
15年	(1408)	畠山満慶、畠山家の家督を兄の満家に譲り、満家から能登守護を与えられる。能登畠山家(畠山匠作家)を創設する。	能登畠山	府中 守護館	
永享4年	(1432)	畠山満慶没し、長男義忠が家督を継ぐ。			初代 満慶
亨徳4年	(1455)	この頃、畠山義統が守護となる。祖父の義忠が隠居する。			二代 義忠
応仁元年	(1467)	畠山義統、西軍方で応仁の乱に参戦する。			三代 義統
文明10年	(1478)	応仁の乱が終わり、この頃、畠山義統、能登に下向する。			
15年	(1483)	畠山義統、府中守護館で連歌会を催し、「賦何船連歌」が詠まれる。			
延徳2年	(1490)	畠山義元、能登に下向する。			
明応6年	(1497)	畠山義統没し、長男義元が家督を継ぐ。			四代 義元
9年	(1500)	守護代の遊佐統秀ら、義統の次男慶致を守護に擁立する。義元は越後へ逃れる。(明応の政変)			五代 慶致
文亀3年	(1503)	畠山慶致、父義統の七回忌法要を瑞応山大寧寺で行う。			
永正5年	(1508)	畠山義元、越後から戻り、再び能登守護となる。			六代 義元
12年	(1515)	畠山義元没し、慶致の長男義総、能登守護となる。			七代 義総
大永3年	(1523)	七尾の招月庵で「賦何路連歌」が詠まれる。			
5年	(1525)	七尾城内の義総邸で「賦何人連歌」が詠まれる。			
6年	(1526)	畠山義総、七尾城内で歌会を催し、冷泉為広・為和父子、列席するが、同年冷泉為広 七尾で没する。			
天文8年	(1539)	絵師の長谷川等伯(信春)、七尾に生まれる。			
13年	(1544)	禅僧の彭叔守仙が「独楽亭記」に七尾城と城下のようすを記す。			
14年	(1545)	畠山義総没し、次男義統が家督を継ぐ。			八代 義統
6年	(1547)	畠山駿河(義総の弟)ら、能登に侵入し、重臣の温井総貞らによって鎮圧される			
19年	(1550)	この頃、能登の内乱(遊佐統光と温井総貞の対立)によって七尾城下が焼失する。			
20年	(1551)	この頃、重臣七名からなる「畠山七人衆」が領国支配の実権を握る。	九代 義綱		
弘治元年	(1555)	この頃、畠山義統の長男義綱が守護となる。隠居した義統は恵祐と号し、義綱の後見人となる。			
永禄9年	(1566)	畠山義統・義綱父子らが、温井紹春を謀殺し、大名権力の回復をはかる。			
永禄11年	(1568)	温井一党が一向一揆などの支援を得て、七尾城方と対峙する。(弘治の内乱)	十代 義慶		
天正2年	(1574)	畠山義綱、七尾城に攻め込み、包囲する。			
天正4年	(1576)	畠山義慶、重臣に毒殺され、弟義隆が家督を継ぐ。	十一代 義隆		
天正5年	(1577)	遊佐・三宅・温井氏らが上杉方に内応し、開城に反対する長氏一族を謀殺する。七尾城が落城し、能登畠山氏が滅亡する。	上杉 謙信	七尾城(山城と城下)	
天正6年	(1578)	上杉謙信、急死する。(43歳)	景勝		
天正7年	(1579)	温井景隆ら鯨坂長実を追放し、七尾城を奪い返す。			
天正9年	(1581)	織田信長、菅屋長頼を七尾城代とし、温井景隆・三宅長盛が石動山へ退き、その後越後へ行く。	織田 菅屋長頼	小丸山城(平山城と城下)	
天正10年	(1582)	前田利家、織田信長より能登一国を与えられる。 織田信長、菅屋長頼に能登・越中の城割りを命じ、安土へ戻らせる。 本能寺の変で織田信長が自害する。(49歳) 温井景隆・三宅長盛ら、越後勢とともに石動山に入るが、前田利家・佐久間盛政らによって滅ぼされる。 利家、石動山を焼き討ちする。(石動山・荒山の合戦) この頃から、前田利家が所口の丸山に築城を開始する。	前田 利家		
天正11年	(1583)	前田利家、豊臣秀吉より、石川、河北二郡を与えられ金沢(尾山)へ移る。 前田安勝(利家の兄)が、七尾城代となる。	城代 安勝		
天正12年	(1584)	前田利家、加越国境などで越中の佐々成政と戦う。 佐々成政勢が七尾城を包囲する。			
天正13年	(1585)	佐々成政、羽柴秀吉に降伏する。			
天正17年	(1589)	愛宕山の気多本宮や小島・所口の百姓屋敷を明神野に移す。			
文禄2年	(1593)	前田利家の次男利政、豊臣秀吉より能登一国を与えられる。	利政		
文禄3年	(1594)	前田安勝没する。長男利好が七尾城代となる。	城代 利好		
文禄4年	(1595)	所口の惣構え堀の開削を進める。			
慶長4年	(1599)	前田利家、大坂で没する。(63歳)			
慶長5年	(1600)	関ヶ原の戦い。 前田利政が改易され、利政領は加賀藩領となる。	利長		
慶長8年	(1603)	徳川家康、江戸幕府を開く。			
慶長15年	(1610)	前田利好没する。利家三男知好が七尾城代となる。 長谷川等伯、江戸で没する。(72歳)	城代 知好		
元和元年	(1615)	「一国一城令」が出される。			
元和2年	(1616)	七尾城代前田知好(利家三男)、京へ上り七尾(小丸山)城廃城。			

## 第6項 発掘調査と石垣の分布調査

### 1 七尾城跡の発掘調査

七尾城跡の発掘調査については、石垣修繕や砂防工事に伴う簡易的な調査が下記のとおり3件行われているだけで、七尾城跡の遺構の時期比定に至るまでの資料はほとんど得られていない状況である。

唯一、平成19年度(2007)～平成20年度(2008)に実施した桜馬場北側石垣(A0405)の修繕工事に伴う発掘調査により、A0405が16世紀後半以降に構築あるいは改築されている状況(図34)を確認し、現状を含めて3時期の変遷を初めて確認する成果を得ている。

表14 調査一覧表

No.	年度	箇所	原因	担当	調査概要	主な成果
1	1972	木落川上流	砂防ダム(第4号)建設	市教委(調査委員会)	遺構平面図作成・遺物採集	2段積石垣の確認と陶磁器類の採集
2	1989	桜馬場北側	石垣(A0404)修繕	市教委	崩落した石垣覆土の調査	陶磁器類等の採集
3	2007～2008	桜馬場北側	石垣(A0405)修繕	市教委	裏込、根石、層序(初の調査)	石垣の構築状況・時期(変遷)の確認

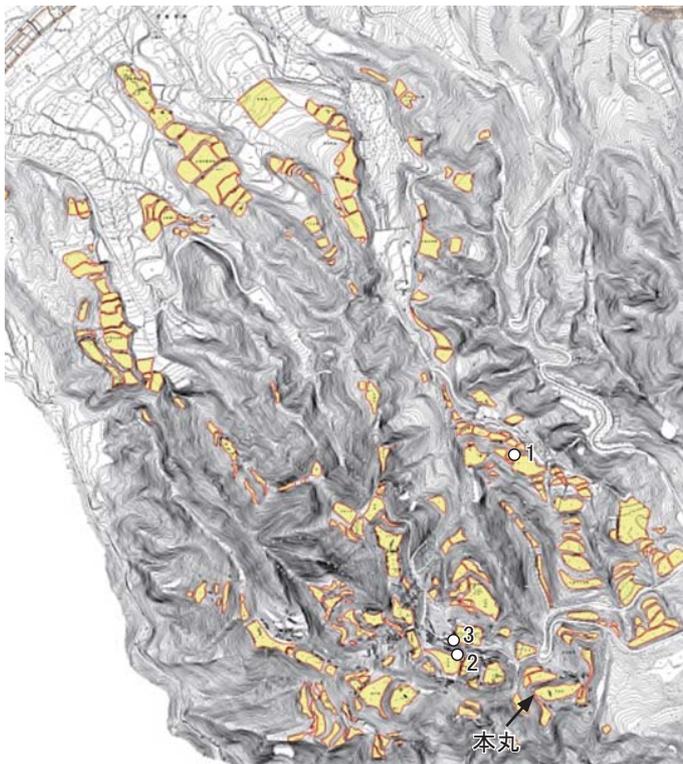


図32 七尾城跡発掘調査位置図



図33 A0405調査状況1(北から)



図34 A0405調査状況2(西から)

A0405はSK02を削って構築している。

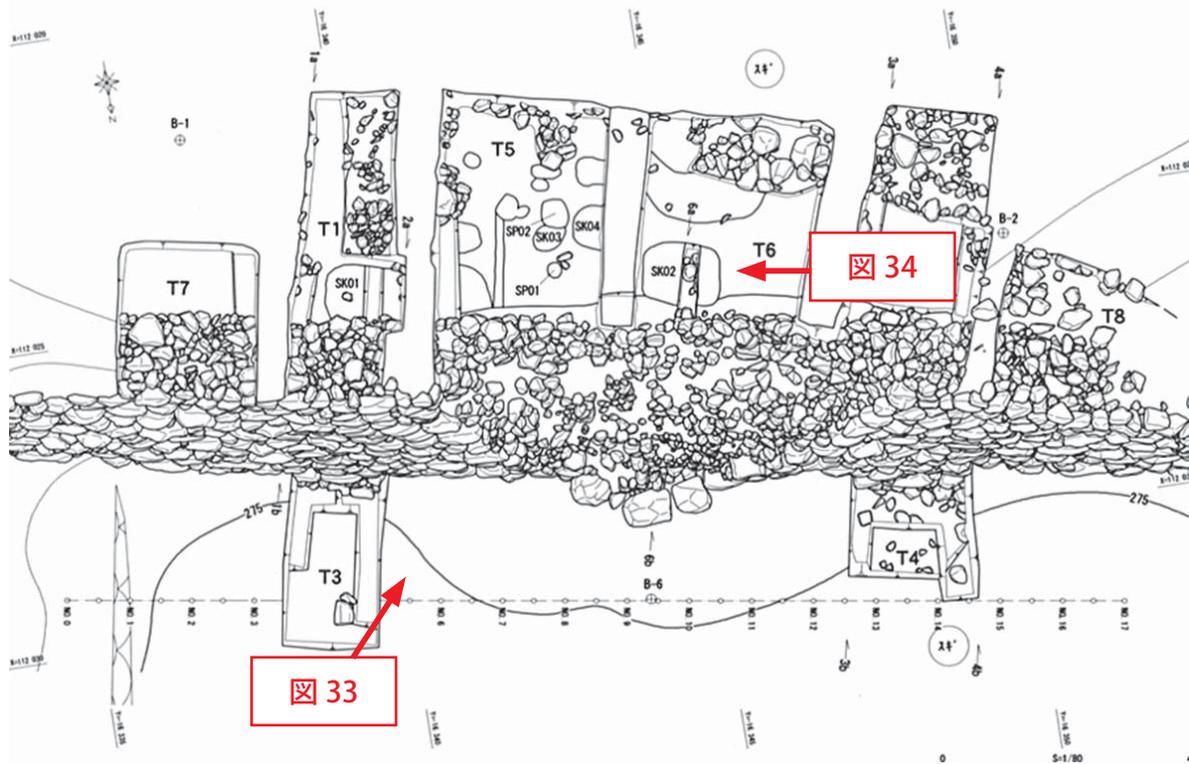


図 35 桜馬場最下段石垣 (A0405) 発掘調査平面図

## 2 七尾城下の発掘調査

七尾城下の発掘調査は、城下北辺のシッケ地区（1991年）での緊急調査以後、市による範囲確認調査や県による能越道建設に伴う緊急調査が平成25年度まで継続的に行われ、城下の範囲や構造、変遷などの概要が明らかにされてきている。

発掘調査成果から明らかにされた七尾城下は、七尾城の山麓部にあたる古城町から古屋敷町にかけての緩斜面に16世紀前半に形成され、16世紀末頃までに廃絶する。この間の16世紀後半には、城下の中央部を東西に横断する堀や切岸による大規模な防御施設となる惣構えを新たに築いて、城下の再編を行っていることも確認されている。

さらには、地籍図から復元できる町割りの区画や、寺院・町屋などに関連する小字名が往時の状況をとどめている可能性が高く、山上の城郭とともに戦国期の山上山下が一体となる城下町の遺構が良好に遺存していることも確認されている。

以下に、これまでの発掘調査成果の概要を示す。

表 15 七尾城下の主な発掘調査一覧表

No.	時期	主体	調査面積 (m <sup>2</sup> )	原因	主な成果
1	平成3年 (1991) (図 36-1)	市	570	緊急 (デイサービスセンター建設)	①シッケ地区で、整然とした町割りに基づいて形成された七尾城下の所在をはじめ考古学的に確認する。 ②城下は、16世紀第2四半期頃に形成され、16世紀末頃までに廃絶することを確認する。

					<p>③和鏡などを製作した鋳物師の居住を特定する。</p> <p>④地割や小字名が往時の状況をとどめている可能性を想定し、今後の調査・解明にむけた方向性を示す。</p>
2	平成 7 年 (1995) ～ 平成 10 年 (1997) (図 36- 2～24)	市	1,189	学 術 (範囲確認)	<p>①大手道と伝承する旧道が、戦国期の主要道路を踏襲することを確認する。</p> <p>②古城町と古屋敷町の町境となる段差が、城下再編時に防御施設として築かれた惣構えの痕跡であることを確認する。</p> <p>③城下の大手道沿道には、町屋や武家屋敷などが連続して所在し、惣構えの外（北側）にも、手工業生産を担った町屋が展開したことを確認する。</p> <p>④惣構えと大手道が交錯する通称「門の高」には、堅固な構造の出入口が築かれていたことを確認する。</p>
3	平成 17 年 (2005) ～ 平成 19 年 (2007) (図 36- 能越道路線内)	県	19,750	緊 急 (能越道の橋 脚位置を決 める確認調 査)	<p>①堀と切岸で構成される惣構えを確認する。</p> <p>②堀と切岸の接続部分に、城戸の内と外を繋ぐ出入り口の存在を想定する。</p> <p>③木落川が惣構えを兼ねた東側の防御線であったことを想定する。</p> <p>④惣構えの内側で、石組の側溝を持ち、砂利敷き舗装された大手道を確認する。</p> <p>⑤大手道沿道に、石垣で区画された屋敷地、掘立柱建物や堅穴状遺構を伴う屋敷地を確認する。</p> <p>⑥惣構えの外側で、鍛冶、鋳物、金工、染め物、甲冑などに関わる職人の居住を想定する。</p>
4	平成 19 年 (2007) (図 36-25)	市	300	緊 急 (能越道仮設 道路建設)	<p>①大手道の南延を確認する。</p> <p>②土師器生産窯を確認する。</p>
5	平成 20 年 (2008) ～ 平成 25 年 (2013) (図 36- P1～P10)	県	11,175	緊 急 (能越道の橋 脚建設箇所)	<p>①惣構えの外側にあたる庄津川西岸及び木落川東岸において、戦国期～近世の遺構を確認する。</p> <p>②大手道に面する、石垣で区画された屋敷地の配置と内部の構造を確認する。</p> <p>③城下では、軟弱地盤区域にあっても、盛土整地を繰り返し、生活面を造成していることを確認する。</p>
6	平成 2 年 (2012) (図 36-P11)	市	200	緊 急 (能越道の橋 脚建設箇所)	<p>①木落川東側で城下に隣接する戦国期の遺構を確認する。</p>



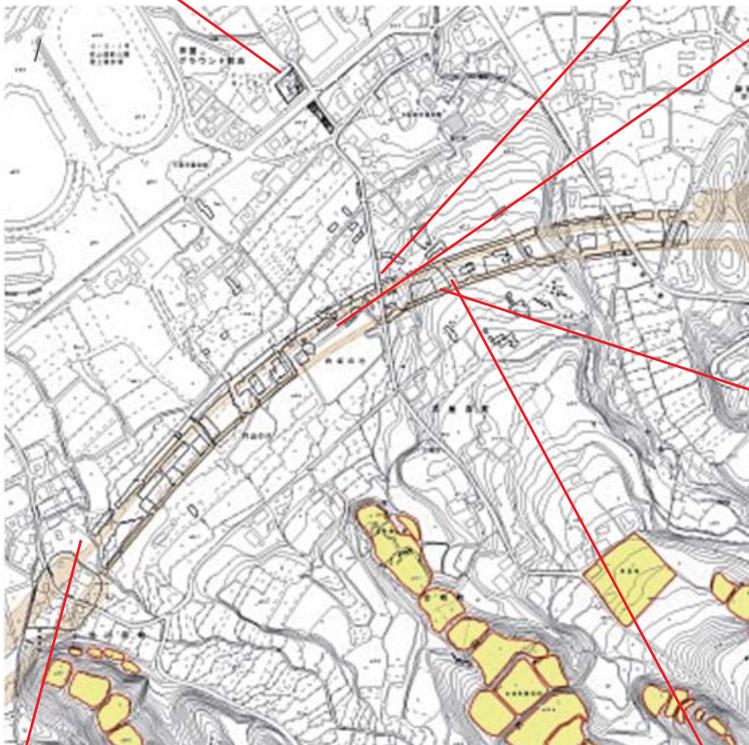
図 36 七尾城下発掘調査地位置図 (S=1:5,000)



1. シッケ地区 (表 15 No.1)



2. 惣構え [切岸] (表 15 No.2 - ②)



3. 土取り跡 (表 15 No.3 - ⑥)



4. 屋敷地の石垣 (表 15 No.5 - ②)



4. 能越道建設に伴う調査地全景 (西から)



5. 伝大手道 [城戸内] (表 15 No.3 - ④)

図 37 七尾城下の主な発掘調査